



一学期も終わり、夏休みに入りました。先生方も研修や部活動などでお忙しいことと思いますが、暑い日が続いています。体調には十分注意されてください。

第1回弱視学級担当者等研修会について

5月に計画をしていて、直前のコロナ感染症増のために延期していた第1回弱視学級担当者等研修会を、6月25日（金）に行いました。今回はお忙しい中、8名の先生方にご参加いただきました。

前半では自立活動や個別の教育支援計画の概略の説明と眼の構造や病気、支援についてなどについての研修を行いました。

| | | |
|--|---|--|
| <p>個別の教育支援計画</p> <p>「将来の生活に関する希望」 「支援をする上での基礎となる情報」 「合理的配慮」 「3年後に目指したい自立の姿」 「各機関からの具体的な支援について」</p> | <p>見える仕組み</p> <p>水晶体 角膜 網膜 像 視神経 虹彩 毛様体</p> | <p>見えにくさへの支援</p> <p>(1) 拡大して見やすく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目を近づける ・教材の文字や絵などを拡大する ・授業前に、使うページや図に付箋を付ける ・視覚補助具やICT機器などを活用する |
|--|---|--|

その後は先生方から、日頃の実践や気づいたことなどを話していただきました。下記に一部を紹介します。

【これまでに児童生徒と関わって見つけた見え方や気づき】

- ・矯正視力の数値では見えているように感じていたが、目の動かし方によってはあまり見えていないときがある。
- ・ボールのキャッチなどの距離感や、バランス運動が苦手。
- ・パソコンの画面を見えやすい大きさに拡大して、見ることができるようになった。
- ・分度器の目盛りなど道具の細かい部分が見えにくい。
- ・斜面台の板が透明で、プリントが裏写りして見えにくい。
- ・好きなものはよく見えている。
- ・外の明るさが苦手だったり、日陰に入ると、目が慣れるまでに時間がかかったりする。
- ・電子黒板がよく見えない。
- ・明るさを調整したり配慮したりすることが多くある。
- ・自分のものという目印として同じ色や形のシールを使うと、見つけることができるようになった。

【学校の協力体制】

- 児童生徒が通る通路には、ものを置かないようにしてもらった。
- お願いや相談はできるが、ほかの先生も視覚障害について分からないことが多い。
- 前年度の担任がいるため、質問しやすい。
- 担任の先生以外の授業では、事前にプリントの拡大などの準備ができない。
- 管理職に相談をすると、スロープなど校内を整備してくれた。
- 交流学級の担任の先生が、事前に学習するページを教えてくれたり、プリントを拡大してくれたりと協力してくれる。
- 4月に、共通理解の為にプリントをほかの先生たちに配布したが、年度初めで忙しく、あまり理解してもらえなかった。

今回は小中高の先生にご参加いただいたので、校種による状況等についてもお話しいただきました。

中学、高校になると教科担任制になることもあり、座席や文字の大きさなどの協力が得られないことがあるというお話もありました。特に高校になると拡大教科書もほぼないという状況なので、弱視レンズを適切に使用できるなど、自分で様々なことに対応できるようになっておく必要があります。また、見えにくさのある高校生が、入学後にクラスで自分の見え方を知らせ、協力を依頼したというエピソードを紹介していただきました。しかも先生の促しなどもなく、自発的に行ったということで、とても参考になりました。

弱視レンズについて

弱視レンズには、遠用弱視レンズと近用弱視レンズの2種類があります。

遠用弱視レンズ（単眼鏡）は、短い距離でもピントが合うように作られていて、黒板や掲示板、駅の時刻表などを見るのに用います。

近用弱視レンズ（ルーペ）は読書・観察など、近くの物を見る用途に使います。学習だけでなく、遊びの場面でトレーディングカードを見たり、日常生活の中で冷凍食品の調理法を見たりというように、生活の中の様々な場面で使われています。形は手持ち型・眼鏡型・卓上型に分けられます。



遠用弱視レンズ（単眼鏡）



近用弱視レンズ（ルーペ）

《弱視レンズの選定》

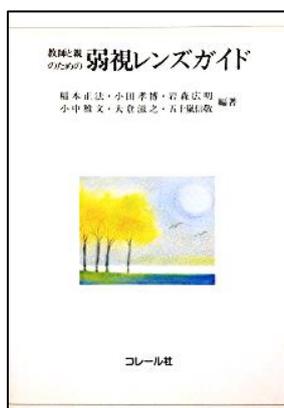
弱視レンズは使う人の視力、眼疾患、年齢、使用場面などによって選定します。

遠用・近用ともにレンズにはさまざまな倍率がありますが、倍率が高ければよいというわけではありません。倍率が高くなると、ピントを合わせるのに技術が必要になり、実視界も暗く狭くなってしまいます。見ようとする教材が視認できる倍率で、さらに形・大きさ・重さ・操作性・堅牢性に注意しながら、用途に合った物を選びます。

《弱視レンズの指導》

弱視レンズは、持ってすぐに自由に使えるというものではありません。ピントを合わせることや、ピントを合わせながら見る物に沿って動かすこと、狭い視野でスムーズに文字を読むことなど、速く正確に使いこなす技術が必要です。したがって、段階的で継続的な練習を行うことがとても重要です。早期に指導を始める方が、結果として、より高度な技術を身につけることができます。

自立活動の時間だけでなく、単眼鏡を使って板書をノートに写したり、ルーペを使って教科書や資料を読んだり、毎日の学習において活用することで、習った技術を忘れることなく、使いこなせる自分の技術にしていきます。



なお、指導にあたっては、コレール社から出版されている『教師と親のための弱視レンズガイド（稲本正法・小田孝博・岩森広明・小中雅文・大倉滋之・五十嵐信敬編著）』に詳しい内容や指導プログラムが掲載されていますので、お読みください。

遠視性弱視について

子どもたちの目は、「見る機能」が発達の途上にあり、生まれてから、ものをしっかり見る経験を積むことで、網膜の中心部が刺激され、視力が発達していきます。

ところが、強い遠視があると、遠くのものも近くのものもボンヤリとして見にくいいため、網膜への刺激が不足し、視力の発達が妨げられてしまい、弱視になってしまいます。

遠視が原因でおきる弱視には次の二つがあります。

一つは「屈折異常弱視」。これは、両目の遠視が同じくらい強いためにおこります。もう一つは「不同視弱視」。これは、遠視の程度が左右の目で異なるために視力差が生じ、遠視の目をあまり

使わなくなるためにおこります。

屈折異常弱視も不同視弱視も、治療として良く行われるのは見え方にあった眼鏡をかけることです。眼鏡によりピントがあった像を見ることで視力も発達していきます。そのため、眼鏡は常にかけておかなければなりません。たとえば本を読むときやテレビを見るときしか眼鏡をかけないということでは、治療の効果は望めません。特に不同視弱視の場合は左右の視力差のために、眼鏡をかけると違和感を覚え、はずしたがることがあります。もし、遠視性弱視の子どもが授業中に眼鏡をはずしているようなら、かけるように促してください。



また、不同視弱視の場合は眼鏡での治療に加えて、視力が良い方の目にアイパッチをすることがあります。これは良くない方の目を使わせることで、視力の発達を促すためです。ただ、学校ではまわりを気にしてアイパッチをしたがらなかったり、心無い言葉を言われたりすることがあります。そのため、アイパッチをすることが治療だということをまわりの子どもたちに説明するなどして、アイパッチをしていることへのサポートも必要です。

眼鏡にしろ、アイパッチにしろ、主治医の治療の方針や内容を保護者と確認し、それに沿って学校でも行うことが大切です。

日頃の指導で悩まれたり、困られたりしていること、「こういう資料がないか」などがありましたら、お気軽にご連絡ください。
巡回相談の依頼も受け付けています。

佐賀県立盲学校 電話 (0952) 23-4672 代表メール mougakkou@education.saga.jp
FAX (0952) 25-7044 ゆうあい担当 miyata-yoshihiro@education.saga.jp